

- 1 派遣期日 令和5年11月17日(金)
2 研修先 学校名(会場名) 川口総合文化センター・リリア, 川口市立南中学校
所在地 埼玉県川口市川口3-1-1, 埼玉県川口市舟戸町2-3
<https://www.saitama-bijutsu.jp/> (埼玉県美術教育連盟ホームページ)

3 研修内容

大会名「第62回関東甲信越静地区造形教育研究大会」「第63回埼玉県造形教育研究大会」

(1) 全体会

本研究大会は、予測困難な時代の中、子どもの未来を拓く造形教育の新天地「Artlearntis (Art learn transformation inclusion sustainability) アートラーンティス」を探求するというテーマのもと開催された。Artlearntisを目指す指針として、人間的な彩りのある社会を築いていくために、造形活動を通して獲得される造形的な視点や想像力、社会や生活と関わる力を育むことをあげた。また、埼玉県造形教育研究大会の、①受け止めよう子どもの心、②育てよう確かな力、③深めよう生き生き授業、の3つの追求観点について、造形教育の原点に立ち返って提示した。

(2) 分科会

ねらいの特性ごとに7つの分科会で構成されていた。私が参加した第3分科会「Create」は、「自己表現」をねらいとして、小中学校を対象にグループ研究と個人研究が行われた。グループ研究は2グループ体制で取り組まれ、①「Art Base」では、自分がつくりたいものをイメージし、表現することができる児童生徒を育むこと、②「図美好場(ずびずば)」では、児童生徒が表現したいことを見付け、発想や構想を深める指導を探求することを要旨とした。また、個人研究も2つ実践され、①「主題を深めながら主体的に表現する実践」と、②「材料に触れながら思いついたことを表す造形活動の実践」が行われた。本報告書では、中学校で行われた「図美好場」の授業実践と、個人研究①について記述することとする。

○実践発表「図美好場」 学年：第3学年

題材名：BOOK ARTで伝えたい願い～人を想う本の佇まいとは～

【題材の内容・留意点】

- (1)「自分の推しの本の装丁」と「うらわ美術館の絵本」の比較鑑賞で、①誰に伝えたいか②伝えたい内容③伝える方法という観点のもと、深く鑑賞する。
- (2)本の世界に没入したところで、うらわ美術館学芸員講演で「BOOK ARTって何?!」と問いかせられ、学びのスタート地点に立つ。
- (3)「綴じて伝えたい願いや作りたい本の佇まい」について、生徒が人を想って発想する時間を設ける。

○実践発表「主題を深めながら主体的に表現する実践」 学年：第3学年

題材名：15歳のわたし

【提案発表の要旨】

生徒が表現を主体的に探求できるようにするために、以下の2点について提案した。

- ①「表現したい」という思いが湧き上がるような題材設定にすること。
- ②表現したいものをどうすれば実現できるかを試行錯誤する時間と空間を保障すること。

【題材の内容・留意点】

- (1)ピカソの自画像を鑑賞し、人生と作風の変化を捉えながら、心の中を表現するための形や色彩の工夫について考える。
- (2)題材名を伝え、今の自分の心の中を形・色彩に託し、未来に向けて表現することを投げかける。
- (3)表したいイメージが固まったら、今までの学びの中から表現方法を自分で選択し、美術室内の用具や材料を試しながら制作していく。

(3) 公開授業 学年：第2学年

題材名：きらり川口スマイルプロジェクト～デザインの力でもっと住みたいまちへ
【題材について】

デザインの要素や必要性、よいデザインとは何かについて考えることで、まちのイメージや暮らしやすさが変わる実感を持つことをねらいとする。そこで、どのようなデザインがあったら、住みたいまちになるかという課題から授業を展開した。

【本時の活動】（9/10時間目）

目標：自分たちのデザインの魅力を伝えよう。

デザインのよさを感じ、さらに深めよう。

(1)生徒たちが考えたまちのあらゆるデザインのプレゼンを行う。

(2)ワイワイタイムで改善点を話し合い、質疑応答やジャッジを行う。

4 感想

(1) 分科会からみえた美術科の課題と得られた成果

分科会の2つの授業実践を踏まえて、美術科の授業において、どの題材でも共通して課題となるのが、「発想・構想のための教師側のねらいがばらつく」と、生徒同士での学び合いの場で思考状況に差が生まれてしまう」という点である。この課題を解決するヒントになるのが、実践発表「図美好場」の成果にあった、「この題材では児童生徒が何を視点に、何を手掛かりに思考していくのかについて授業者がねらいを明確にしておくこと、またそれをすべての児童生徒が共通して理解し、通過できるようにすること。」ではないかと考える。また、もう一つの実践発表では、生徒は小学校図画工作科での学びが土台にあり、美術科とのつながりを意識して指導計画を立てることが重要としている。これを踏まえて、指導者の岡田先生は「逆に言えば、小学校でやることは中学校ではやらなくてよい」と提言した。図画工作科で学んできた内容を適宜取り入れて授業づくりをしていくこと、生徒が図画工作科で何を学んできたかについて常にアンテナを高くしておくことを意識したい。

協議会に参加した他の先生から、発表者の先生は、とにかく生徒の話の聞き役に徹する先生だと伺った。表現の可能性が無限にある美術科の授業において、教師が「話す」行為には畏があると思いついた。私はよく、「こうなるとよりよい作品になるのではないか」という方向に、暗に生徒に「話し」てしまう。重要なのは、生徒自身の表現したいイメージをすくい上げるように、生徒の思考を広げていくようなイメージで声かけをすることだと考えた。

(2) 公開授業

自分たちの力でまちのよさや改善点を見出す活動について、大人が同テーマでまちのデザインを考えると、当たり前のように複数人でアイデアを出し合うことから、本題材には、他者に思いを伝えながら対話し、思考を広げていくという、これからの時代に必要な力を育むことにつながる活動が取り入れられていた。

また、授業での質疑応答の時間に、「商業化」や「デザイン性」、「機能性」など、デザイン分野のポイントを押さえたキーワードを生徒から自然に引き出すことができていた。まちをよりよくするデザインを熟考していく活動の中で、専門的な用語もあわせて身に付けていた。

公開授業後の協議会の際に、「生徒がデザイン自体をどのように捉えているのかを知りたかった」と述べた授業者の思いに共感した。美術科教員は、生徒一人一人の思いやよさを引き出し、可能性を広げるべき存在である。「(1)分科会からみえた美術科の課題と得られた成果」でも述べたが、授業をつくる際に、「生徒が何を視点に、何を手掛かりに思考していくのかについて授業者がねらいを明確にしておくこと」が肝要である。特に、デザインの授業においては、生徒が普段から実感している社会との関わりに焦点化することに有用性や可能性があり、今回の題材では、地域で有名な「鋳物」の会社との共同授業を行っていた。自校でも、日立の有名な建物を作った建築家を活用した授業が考えられる。地域のよさや生徒にとって身近にある美術を生かした授業づくりの実践であった。